

令和7年度  
「人権作文コンテスト」  
「人権ポスターコンテスト」  
「子どもたちによる  
“平和なまち” 絵画コンテスト」  
優秀作品集



市長賞 今泉中学校 二年  
大高 優奈

海 老 名 市  
海老名市人権擁護委員会

## は し が き

### ◆ 令和7年度海老名市中学生人権作文・ポスターコンテスト

海老名市人権擁護委員会は、人権思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、次代を担う多くの中学生の皆さんに、日常の家庭生活や学校生活等の中で得た体験に基づいた作文を書くこと、またポスターを描くことを通じて、人権尊重の必要性・重要性について理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的として、毎年人権作文及び人権ポスターを募集しております。

令和七年度は、市内の中学校から、三百九十三編の作文、五点のポスターを応募いただきました。いずれの作文、ポスターも中学生らしい純粋な感覚で物事をとらえ、人権の重要性について真剣に考えていこうという意欲が伺えるものばかりでした。この作品集は、入選した十四編、四作品を収録しております。一人でも多くの方に読んでいただき、人権尊重の精神が更に大きく広がる事を願ってやみません。

◆ 子どもたちによる“平和なまち” 絵画コンテスト2025

海老名市は、2010（平成二十二）年より「平和首長会議」に加盟都市として参画しております。

「子どもたちによる“平和なまち” 絵画コンテスト」は、「平和首長会議」の加盟都市における平和教育の更なる充実を図ることを目的として、全加盟都市の六歳以上十五歳以下の子どもたちを対象として2018（平成三十）年に初めて実施され、海老名市は第三回の2020（令和二）年から参加しております。

今回、第七回の2025（令和七）年、本市の応募作品は六〜十歳部門が十五作品、十一〜十五歳部門が十一作品の合計二十六作品の応募があり、十月中旬の審査会で各部門五作品を本市の優秀作品として選定し、「平和首長会議」へ応募作品を提出しており、いずれの作品も子どもたちの純粋な感覚で物事をとらえた感心できるもので、今年のテーマ「私にとっての平和」をイメージした素晴らしいものでありました。

それぞれの作品に込めた平和への思いも掲載しております。

応募されたみなさんへ、この場をお借りしてお礼申し上げます。

令和七年十二月 海老名市市民協働部市民相談課

## 目次

### ◆ 人権作文部門

#### 市長賞

ありのままの自分と人権について  
普通ってなんだろう



海老名中学校 三年 小野 巧翔  
柏ヶ谷中学校 三年 石川 優奈

…  
1

#### 優秀賞

後期高齢者を持つ家族と人権の話  
平等に暮らすには  
相手を思いやる心から学んだ人権の大切さ  
「普通」とは  
障がいを理由とする偏見や差別をなくそう  
「個性」を知る  
兄の働き方から考える  
「キセキ」

海西中学校 三年 飯島 颯一  
海西中学校 三年 匿名  
海老名中学校 三年 尾崎 優菜  
有馬中学校 三年 木原 みんみ  
海老名中学校 三年 佐藤 結菜  
海西中学校 三年 濱田 梨央南

…  
6  
…  
8  
…  
10  
…  
12  
…  
14  
…  
16  
…  
18  
…  
20

「障がい者の働く環境」  
基本的人権を守る意味  
「言葉の重さ、思いやりの力」  
何も変ではない

◆ 人権ポスター部門



市長賞

なりたい自分へなれる自由を

優秀賞

育てよう思いやりの心  
あなたの笑顔がもどるまでずっとそばにいるよ  
育もう！つながる心

海西中学校	三年	松田 風雅	⋮	22
海西中学校	三年	山川 結希	⋮	24
海西中学校	三年	横山 アイシヤマフムード	⋮	26
		匿名	⋮	28

今泉中学校	二年	大高 優奈	⋮	31
-------	----	-------	---	----

海老名中学校	二年	何 霖	⋮	32
今泉中学校	一年	皆川 真帆	⋮	32
今泉中学校	一年	深谷 あかね	⋮	33

◆ 子どもたちによる “平和なまち” 絵画部門

【優秀作品】

六～十歳

有鹿小学校	二年	雨宮 世奈
今泉小学校	三年	里田 美月
柏ヶ谷小学校	三年	高野 香穂
門沢橋小学校	二年	谷井 彩帆
海老名小学校	一年	田原 ゆず季

十一～十五歳

海老名中学校	一年	中島 百香
有馬小学校	五年	福田 優里奈
有馬中学校	一年	藤本 桜子愛
杉久保小学校	五年	守屋 咲音
柏ヶ谷中学校	三年	渡邊 葵



⋮  
44 43 42 41 40

⋮  
39 38 37 36 35

⋮  
34



人権作文部門



海老名市イメージキャラクター  
えび～にゃ

## 市長賞

### ありのままの自分と人権について

海老名中学校 三年 小野 巧翔

私は中学一年生の頃、人前で自分らしくふるまうことができませんでした。小学生の頃は、好きなことを自由に話し、友達とも自然に笑い合っていました。しかし、中学生になるとクラス替えがあり、新しい友達や先輩との関係が始まります。話題は流行しているアニメやゲーム、SNSのことが多く、私はそのどれにもあまり興味がありませんでした。

みんなの輪に入ろうと頑張っても、「本当は興味がなければ、合わせなければ。」と無理をしていました。次第に「自分を変なのではないか。」「このままでは友達ができないのではないか。」という不安で胸がいっぱいになりました。休み時間、友達が盛り上がり笑っている輪の外で、作り笑顔だけを浮かべている自分に気づいたとき、強い寂しさを感じたことを覚えています。

ある日の夜、何気なくその気持ちを母に話してみました。

「みんなと話題が合わないんだ。どうしたら合わせられるかな。」

母はしばらく考えてから静かに言いました。

「無理して合わせなくてもいいのよ。まだ子どもなのだから、自分の思うように、自分らしくいることが大事。人権って言葉、知っている？人は誰でも自分らしく自由に生きる権利があるのよ。」

その言葉はすっと胸に入りました。それまで授業で「人権」という言葉を聞いたことはありましたが、自分の日常とは遠いものだと感じていました。しかし、「自分らしくいられること」や「自分の気持ちを話せること」も人権の一つであると知った瞬間、世界の見え方が少し変わったのです。

翌日、私は少し勇気を出してみることにしました。休み時間、友達が話している輪の中で、流れを壊さないようにしながら、自分が最近見て面白いと思ったアニメの話をしました。「あまり反応してもらえないかも。」という不安がありました。が、思い切って話しました。思いがけず

「それ見たことある。」と友達が反応してくれ、会話は広がりました。

「今度一緒に見ようよ。」と言ってくれた子もいました。

それから少しずつ、自分の気持ちや考えを話すようになりました。部活でも、「この練習方法をやりたい。」と感じたことを顧問の先生や先輩に伝えたところ、

「確かにそれもいいね。やってみよう。」

と受け入れてもらえたこともあります。「言っても無駄」と思っていた自分が、伝えれば変わることもある」と知った瞬間でし



た。

この経験を通して、私は「自分の意見を言う権利がある」ことを実感しました。同時に相手の話に耳を傾けることも大切だと学びました。お互いが話を聞き合い、受け止め合うことで、より良い関係が生まれるのだと思います。

今、世界にはさまざまな理由で自分らしく生きられない子どもたちがいます。学校に行けない、家庭の事情で夢をあきらめる、言いたいことがあっても大人に聞いてもらえない。

そんな子どもたちがいることを、私はニュースやSNSで知りました。私が小さな勇気を出せたのは、周りの人たちが受け止めてくれる環境があったからです。それは決して当たり前ではなく、その環境がない子も多いのです。その事実を知ったとき、胸が痛みました。

だからこそ、これからは友達や後輩だけでなく、誰に対しても「その人らしさを大切にしよう」と思います。たとえ意見が違っても、笑ったり否定したりせずに

「そういう考えもあるんだね。」

と言える人でありたいです。そんな小さな関わりの積み重ねが、「自分らしく生きられる世界」をつくるのではないかと感じています。

中学生生活がすすむ中で、私は「自分はこれでいい」と思えるようになり、人の話も真剣に聞けるようになりました。もしあのとき母に相談していなかったら、今も周りに合わせるばかり

で苦しかったかもしれません。これから先、高校生、大人になっても、自分らしさを押し込めたくありません。そして、誰かが勇気を出して話したときには、真剣に耳を傾ける人でありたいです。私がそうしてもらって嬉しかったように。

人権とは、特別な誰かだけに与えられるものではなく、世界中すべての人に等しくあるものです。中学生の私にも、大人にも、遠く離れた国の子どもたちにも同じように与えられています。そう考えるだけで、心が少し温かくなります。私はこれからも、自分も友達も、そしてまだ会ったことのない誰かも、ありのままにいられる世界になることを心から願っています。

## 市長賞

普通ってなんだろう

柏ヶ谷中学校 三年 石川 優奈

「え、それってふつうじゃないよね。」

この言葉を初めて言われたのは、小学校の頃だったと思う。

私は、人より少しテンションが高く休み時間はいつも走り回っていたし、変な声でふざけて笑わせたりしていた。でもある日クラスメイトに言われた。

「優奈ってちよつと変だよね。」

その言葉を聞いたとき、心になにかが引かかった。そこから私は

「ふつうでいなきや。」

と思うようになった。あまり目立たないように、笑いすぎないように、声のトーンを下げて、ちよつと無理して過ごした。周りから浮かないように自分をどこかで押し殺していた。

中学生になっても、その気持ちはどこかに残っていた。みんなの輪に入っても

「今の自分ってちゃんと『ふつう』なのかな。」

と、頭のどこかで考えてしまう自分がいた。

そんなある日、授業中先生がふとこんな話をしてくれた。

「『ふつう』なんて、本当はどこにもないんだよ。みんな違うし、それがあたりまえ。」

私は、その言葉にドキツとした。私がずっと心の中で探していた答えを、その一言がくれたような気がした。そのときやっと気がつけた。私はずっと『ふつう』に合わせようとして、自分を小さくしていた。自分の性格も、話し方も、笑い方も、本当はそのままでよかったのかもしれないと思った。私は、だんだんと自分の変なところ、みんなとは違うところも好きになれるようになった。大きな声で笑うことも、ふざけて友達を笑わせることも、全部、自分らしさなんだと思えるようになった。よく考えたら、友達にもいろんな子がいる。絵がとても上手な子もいれば、静かだけど優しい子、スポーツが苦手だけど一生懸命な子。誰も「完全にふつう」な人なんていない。みんな少しずつ違うからこそ、一緒にいて楽しいのだと思う。人と違う部分は、決して悪いことじゃない。むしろ、その『違い』こそが、その人の個性であり、その人らしさなんだと思う。もし今、誰かが「ふつうじゃない。」と言われて悩んでいるのなら、私のこの作文をそつと読んでほしい。うまく伝えられないかもしれないけれど言葉に救われたことがある私だから、今度は、私の言葉が誰かの力になれたらうれしい。

この作文を書いているうちに、私はふと気づいたことがある。私って気分が変わりやすくて、さっきまで笑っていたのに急に

落ち込んだり、自分でもびっくりすることがある。前までは、そんな自分がめんどくさくてきらいだった。けど、こうして書きながら、救われた言葉と自分で言葉にしてみたこの時間が私の中でゆっくりと自信につながっていると思う。そして、私にそんな考え方を教えてくれた先生のように、人の心に温かい言葉を届けられる人になりたい。“ふつう”という言葉にしばらく、自分らしく生きていく人が増えたら、きつともっと優しい世界になる。そう信じて、私はこれからも自分らしく笑っていききたい。

## 優秀賞

### 後期高齢者を持つ家族と人権の話

海西中学校 三年 飯島 颯一

私たちが高齢になるにつれて発症する可能性がある認知能力や筋力の低下。そして必ずくる「死」という存在。これらについて深く考えさせられたきっかけは祖父でした。

私の祖父はつい最近亡くなりました。死因は老衰でした。亡くなる三年ほど前に祖父は施設に入りました。自分としては知らされたときに、あそこまで元気だったのにどうしてだろうと疑問に思いました。このときはまだ理由は知らされていませんでした。それから数ヶ月後に初めて施設の祖父のもとを訪ねました。部屋のドアを開いた瞬間、僕は祖父が施設に入った理由が一目で分かりました。そこには前とは別人のように痩せ細った祖父が横たっていました。高齢による筋力低下でした。さらに、僕が最初に話しかけたとき、祖父は困った顔をしました。中度の認知症も発症していました。僕はショックを受けました。幸いにも少し時間がたつと思いい出してくれましたが、ここから少しずつ認知症が進んでいって、いつかは完全に僕のことを忘れてしまう日が来ると思うと悲しくてしかたがありませんでした。

た。

その一回きりから僕はしばらくお見舞いには行きませんでした。というよりは行けませんでした。おそらく無意識に僕は弱っていく祖父を見たくなくて避けていたんだと思います。

それから月日はたち、僕が修学旅行から帰ってきた瞬間に祖父が危篤だと聞きました。急いで施設に行くと、そこにはもう喋ることができなくなった息をしているだけの祖父がいました。

それを見て僕はできるかぎり声を出しました。もうほぼ動かない手も強く握りました。家族は、総合病院で延命治療をしてもらおうと提案しましたが、断られてしまいました。理由としては、自力で起きたり、ある程度の行動ができない人は受け入れられないと言われました。僕はなんでなんだと思いました。病院ともあろうものがこんなことをしているのかとその時は思いました。実際、憲法第十三条の「個人の尊重」か、第二十五条の「生存権」などで平等に医療を受ける権利が保護されています。一度は病院に対し、怒りを覚えました。でも確かに、老化による止められないものだとは分かっていたので、病院もどうしようもないし、悪いわけでもありません。しかし、やっぱり悔しくてたまりませんでした。その二日後、僕はそばにいたことしかできずに祖父は静かに亡くなってしまいました。僕はようやく祖父とはもう話すことができないと実感しました。僕は激しく後悔しました。あのときに逃げるんじゃなく、祖父として向きあって、今までの感謝を伝えればよかったと思います。

た。

それでも、僕は生きていかなきゃいけないし、前に進まなければならぬ。それが唯一僕ができる祖父への恩返しだと思うから。

今回はあくまでも僕の話でしたが、どんな人でも大切に、大好きな人がいます。ですが必ず辛く悲しい別れがきます。だからこそ我々は互いを尊重し、助け合う必要があると思います。

今しか伝えられない、気持ち、言葉を目の前の人に伝えられることが、一番の「幸せ」だと思いますか？

## 優秀賞

### 平等に暮らすには

匿名

近年、「ジェンダーレス」など多様な人々を表す言葉が増えてきたことで、個性や性別、国籍、価値観など、さまざまな違いが少しずつ認められるようになってきました。しかし、SNSなどで誹謗中傷を目にすることもあり、自分と違う人を無意識のうちに避けてしまったり、悪気がなくても誰かを傷つけてしまうことがあると感じます。

ある日、テレビで障がいのある方の暮らしを見ていて、私は思わず「可哀想」と感じてしまいました。一見、相手を気遣っているように見えるこの言葉ですが、「自分とは違う」と思っているからこそ出た感情ではないかと気づきました。そこで、「健常者と障がい者が本当に平等に暮らす」とはどういうことなのかを考えたいと思いました。

文部科学省や内閣府のデータを調べてみると、日本はおおよそ九百六十四万人、つまり約八人に一人の割合で障がいのある人が暮らしていることが分かりました。これは、私が行くスーパーや遊園地など、どこにでも障がいのある人がいるということ

です。だけど、私はこれまで身近に障がいのある人がいないと思っていました。しかしこれは、私が障がいについてあまり知識がなかったからです。

「障がい」と聞いて、私はすぐに車いすの人や目、耳が不自由な人を思い浮かべました。しかし調べていくうちに、精神障害や発達障害など、外から見えづらい障がいも多くあると知りました。見た目では分からず、周りの人も気づかないまま接していることが多いことに気づいたとき、だからこそ障がいのある人が「理解されない」と感じることもあるのだと思いました。だからまず、このような事があることを想像できることが、平等への第一歩だと思いました。

では、「本当の平等」に近づくには何が必要なのでしょう。私は、家庭科の授業で聞いた「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」という言葉を思い出しました。バリアフリーは障がいのある人や高齢者などが利用しやすいように物理的な障壁をなくす考えで、ユニバーサルデザインはなるべく多くの人が使いやすいように工夫されたデザインのことです。これらはとても良い考えですが、施設や設備を変えるだけでは足りないと考えました。

本当に大切なのは、「心のバリアフリー」だと思います。例えば、白杖を使っている人が困っているときに「手伝いましょうか。」と声をかけること。ただ声をかけることでも、相手にとっては大きな助けになり、安心してその場にいられると思

ます。実際、私が体調をくずしてしまったとき、「可哀想」と言われたときに嬉しいという気持ちにはなりませんでした。でも、「何か手伝ってほしいことある？」と聞かれたときは、本当にありがたいと思いました。

この体験からも、「同情」や「押しつけられた手助け」ではなく、理解しようとする姿勢と、相手と対等な関係になろうという気持ちこそがとても大切なのではないかと感じました。きつと、障がいのある人も、みんなから特別扱いされたいのではなく、「他の人と同じように過ごしたい。」「当たり前前の生活を送りたい。」と思っているのだと思います。

だからこそ私は、これから多様な人と生活していくなかで、自分と考えが違う人がいるなと感じたとしても、特別な接し方をするのではなく、困っているように見えた人がいたら「何か手伝えることはありませんか。」と自然に声をかけられるようになりたいです。そうすることで、ほとんどの人が嫌な思いをすることなく、みんなが平等に過ごせる社会に近づくのではないのかなと考えています。

このように、「何をしたらよいのか分からないから何も自分には出来ない。」と思い込むのではなく、まずは、なるべくたくさん人のことを「知ること。」が何よりも大切だと思います。障害について、違いについて知ろうとすることが、多様な人々、誰もが自分らしく生きる社会をつくるための第一歩になると私は信じています。

## 優秀賞

### 相手を思いやる心から学んだ人権の大切さ

海西中学校 三年 小笠原 悠真

私は剣道部に所属しています。剣道は「礼に始まり、礼に終わる」と言われるように、礼儀をととても大切にする武道です。竹刀を交わす前後に必ず礼をすることはもちろん、防具をとるとき、また稽古が終わった後に「ありがとうございます」と感謝を伝えることも欠かせません。その中で私は、剣道が単なる勝ち負けの競技ではなく、人と人とを尊重し合うものだということを感じています。そしてその体験を通して、人権の大切さについて深く考えるようになりました。

ある日の練習試合で、私は一度戦って引き分けたことのある人と対戦しました。勝ちたい気持ちばかりが先に立ち、強く打ち込んだり、無理に攻めたりしてしまいました。その結果、その人は痛そうに面を押さえていました。私は勝ったはずなのに、なぜか胸の中は誇らしさよりもむなしさでいっぱいでした。そのとき先生から「相手を大事にできない人は本当の意味では強くなれない」と言われたことを思い出しました。私はその言葉を振り返って目が覚めました。剣道は相手がいるからこそ成り立つものであり、相手を思いやらずにただ力で押し切ることは

本当の剣道ではないのだと気づいたのです。また、別の日の稽古で、私はなかなか技が決まらず落ち込んでいました。そんなとき、友達が「今の動き良かったよ。次はもっと前に出てみよう」と言ってくれました。その言葉に励まされ、私は再び前を向くことができました。誰かに認められること、支えられることは、人が安心して自分らしく力を発揮するために欠かせないことだと感じました。これは、学校や地域社会での生活にも共通していると思います。互いに尊重し合える関係があって初めて、一人ひとりが安心して過ごせると気づけました。人権とは、「すべての人が人間らしく生きるための権利」だと学びました。例えば、学校で誰かがいじめられたり、無視されたりしてしまえば、その人は安心して生活できません。剣道の稽古で「相手を尊重しなければ強くなれない」と学んだことは、まさに人権を守ることに同じだと思います。相手を認め、思いやることが、人が自分らしく生きることにつながっていると理解できました。さらに、市の大会に出場したことも忘れられません。会場にはたくさん学校の生徒が集まり、初めて顔を合わせる人とも試合をしました。試合前に必ず礼をし、終わった後にも頭を下げる光景はとても清々しいものでした。たとえ勝敗がついても、相手を敬う気持ちは変わらない。それは、国や文化が違っても人と人とが互いに尊重し合えることを示しているように思えました。今、世界のニュースでは争いや差別の問題が取り上げられていますが、私は剣道を通じて「相手を認め合う心」



があれば、必ず人権を守る社会をつくっていけると信じています。

日常生活の中でも、人権を守るためにできることは多くあります。友達の意見をしっかりと聞くこと、困っている人がいたら、声をかけること。小さなことかもしれないけれど、その積み重ねが大きな力になるのだと思います。剣道で培った「相手を思いやる心」を、これからも学校生活や地域社会で生かしていきたいです。そして、一人ひとりの人権が大切にされ、誰もが安心して過ごせる社会を作っていくことが、私たちの大切な役割であると強く感じています。また、世界に目を向けると、人権が十分に守られていない国があります。職業が自由に選べない、髪型は国が指定したものでなければいけないという地域があることや戦争や差別によって学ぶ権利を奪われている子どもたちや、安全に暮らせない人々がいるというニュースを耳にすると胸が痛みます。そのたびに私は、平和な日本で剣道を学び、仲間とともに稽古できることが、どれほど幸せなことかを実感します。そして、小さなことでも周りの人を大切にし、思いやりを持って接することが、世界の人権を守る大きな力へとつながっていくのではないかと思います。剣道で学ぶことのできた「相手を思いやる心」は、試合の場面だけでなく、日常生活や社会全体で生きていく上で欠かせないものです。人権を守る社会は、特別な人がつくるものではなく、私たち一人ひとりが、相手の立場を考え、互いを尊重する行動を積み重ねることによって初

めて実現していくと知りました。私は、少し前に最後の大会があったのですが、相手を思いやって試合をすることができました。試合中、相手が転んでしまうことがあったけれど、そこで私は手を差し伸べて「大丈夫ですか」と声をかけました。これは勝ち負けよりも相手を大切にし、思いやったからこそ出来た行動なのだと感じました。私はこれからも剣道を続けながら、その精神を自分の生活に生かしたり、周りの友達、家族など身近な人に人権の大切さを共有したりして、だれもが人権を守り合える社会作りに貢献できる人になりたいと強く思います。

## 優秀賞

### 「普通」とは

海老名中学校 三年 尾崎 優菜

「普通」とはなにか。こう問いかねられてはつきりとその意味を答えられる人はいいますか。私には明確に答えることはできません。辞書で調べると、「特に変わったところがなく、多くの場合そうである様子」と書かれていました。しかし、私はいくつか疑問に思います。「変わったところ」という基準はいったい誰が決めたのか。「多くの場合」という言葉で片付けられていますが、その「多く」に含まれなかった人は、どうなってしまうのか。ただ「変わっている人」とみなされてしまうのでしょうか。

私たちは普段、何気なくこの「普通」という言葉を口にしていきます。しかし、それは無意識のうちに、「多く」に含まれなかった人の考えを否定しているのではと思いました。私たち一人ひとりには違った経験・個性があります。それなのに、「普通」に合わせようとする空気が、私たちを生きづらくさせているのではないのでしょうか。

私は、自分のことを「多く」から除かれた存在だと思いません。なぜなら、私は幼い頃から周囲の人たちに「変わっている

ね。」と言われることが多かったからです。言われた当初は気に留めていなかったのですが、経験を重ねるにつれ、「私って変なんだ。」「思っていることを言ったら避けられるんだ。」と思うようになりました。その結果、考えているけれど行動に移せなくなるが増え、自分らしくいることよりも、周囲に合わせることを優先してしまうようになりました。「普通」ではないカテゴリーにいる人はどうすれば生活しやすくなるのでしょうか。

そもそも、「普通」というのは人それぞれ捉え方も基準も違うと私は思います。私にとつての「普通」が別の人にとつては「変わっている」と感じられることもあることを忘れないでいたいです。「普通」という言葉は誰かを安心させる一方で、誰かを傷つけたり、悩ませたりする。そのことを一人ひとりが理解するべきだと思います。

私には好きな男性バンドがあります。「男性なのにメイクをしていてキモい。」そんな否定的なコメントがある中でその人たちは「自分らしさ」を大切に活動をしています。実は私も、最初は無意識のうちに決めつけていたのです。しかし、「変わってるね。」と言われるのを気にするようになってから、私は自分の意見が間違っていることに気づきました。「自分らしさ」をつらぬくためにはとても勇気が必要だと気がついたからです。メイクは、ただ目立ちたいからしているのではなく、自分を偽らずに生きるための選択なのだとわかることができました。

人権とは、誰もが自分らしく生きるために持っている権利だと習いました。見た目、性格、考え方、生き方など、それぞれが違っていて当たり前なのに、「普通じゃない」と言われて否定されるような世の中だと、安心して自分を出すことはできないと思います。私もそうであるように、多くの人が「普通」という言葉を基準に他人を見ているように感じます。そのため、私は「他人と違うから」という理由で自分を否定しないようにしていきたいなと思います。また、無意識に誰かを否定してしまう人がいたら、いろいろな考えがあってもいいということを伝えられるような人でありたいです。

## 優秀賞

### 障がいと理由とする偏見や差別をなくそう

有馬中学校 三年 木原 みんみ

私の身近には体や知能の面で少し人と違う特徴を持つ親戚がいます。私はその人と一緒に話したりすると、とても楽しい気持ちになります。その人は私にとって普通の存在ですが、世の中には障がいを理由に偏見や差別をする人がいます。私はそれを知ったとき、悲しい気持ちになりました。なぜなら、その人を見ていると障がいがあってもできることはたくさんあるからです。

例えば、私の親戚は日常生活で少し不便を感じることもあります。しかし、それを理由に諦めるのではなく、自分にできることを一生懸命努力しています。けれど、世の中では障がいのある人たちに対して「できないこと」ばかりに目を向け、あたかも何もできないかのように決めつけてしまう人がいます。私は身近な人の経験を通して、その不公正さを強く感じました。障がいを理由に人を判断してしまうのはとても悲しいことだと思います。

さらにインターネット上では障がいという言葉が悪口として使われているのを見ることがあります。私が見た投稿では障が

いのある人をからかうような言葉が書かれていることがあります。また、障がいを持つていない人が少し変わった行動をしたときに、「障がい者みたい」と書いてあり、相手を笑いものにするようなコメントを目にしたこともありました。実際、私の生活の中でも周りの人たちが障がいという言葉が悪口として使っているのを聞いたことがあります。障がいのある人は何も悪くないのにその言葉を悪口として使うことで、実際に障がいを持つ人も、そして言われた人も傷ついてしまいます。こうした言葉の使い方は現実の場でもネット上でも人を傷つけてしまいます。特にネット上ではその言葉が簡単に広がってしまうため、より多くの人の心を深く傷つけてしまう可能性があります。こうしたことを防ぐために、私たち一人ひとりが周りの人の気持ちを考えて行動することが大切です。障がいを理由に人を笑いものにしたり差別することは決して許されないことです。そのため、私たちができることとして例えば学校や家庭で障がいについて正しく学ぶことや周りの人が言葉遣いに気をつけるなど、理解を深める取り組みが必要です。これらの努力を積み重ねることで障がいという言葉が悪口として使う問題を減らし、誰もが安心して暮らせる社会に近づけます。

私は障がいを理由に人を差別せずその人の個性を尊重したいです。また、インターネット上でも誰かを傷つける言葉を使わないように意識します。さらに、困っている人を見つけたら自分から助けにいきたいです。一人ひとりの小さな行動が社会を

少しずつ変えていくと思います。私も自分の行動を通して、周りに良い影響を与えたいです。これからも、人権について考えて自分にできることをやっていきたいです。そして、自分の行動で周りの人が笑顔になるような心がけ、誰もが安心して暮らせる社会づくりに少しずつでも貢献していきたいです。

## 優秀賞

### 「個性」を知る

海老名中学校 三年 佐藤 結菜

夏休みに「人権作文を書く」という課題が出された時に、私は「個性」について考え、書いてみようと思いました。これまでの学習で「多様性の時代」や「個性の尊重」など多く見たり聞いたりしてきました。中学校にLGBTQの人が来てLGBTQとは何かの説明や今までの体験を話してくれて、それも「個性」なのだと学習しました。世界には様々な人種があり肌や目の色の違いがあるのと同じで、外見の性と心の性が違うことで周りの人々と違う日常を送っているということを知りました。

「個性」について最初に考えるきっかけは母の影響です。母は発達障害のある子ども達を支援する職場で働いていたことがあります。発達障害は外見からは分かりづらい障がいだけれど、本人や家族は様々な困難があり苦労していることが多いのだと聞きました。母は、「みんな個性があるのと同じで、その子ども達にも個性があって、ただうまくコントロールできずに困りごとになっているだけ。個性が強く出ているだけで、とても可愛いだよ。」と言っていました。しかし、その「個性」は店で大声を出したり、ウロウロ落ち着きなく動き回ることなどであり、

周りから迷惑そうな顔をされたり白い目で見られたりするそうです。「多様性の時代」であり「みんな違ってみんな良い」はずなのに、その「個性」に対する差別はあるのだと感じてしまいます。

では、一人ひとりが持っている「個性」を「個性」として受け入れ、差別をなくす為には何をするべきなのでしょう。私は、それは「知る」ことだと思います。「LGBTQという個性」については、中学校で直接話を聞く前までは、LGBTQという言葉も知らないし、それが何なのかも知りませんでした。知らないままLGBTQの人と出会っていたら驚いていたかもしれないし、「嫌だ」と感じていたかもしれません。でも、知ることとで理解し、そこから考えることでもっと理解が深まりました。「発達障害という個性」についても同じで、母から聞いて知ったからこそ、店で出会ったとしても本人の苦しみや家族の苦労を理解しようと考えられるようになりました。知っていなければきっと違う反応をしていると思います。

多種多様な「個性」を知る手段として、YouTubeがあります。YouTubeで自分や家族の「個性」を発信している人も沢山いて、その「個性」による困り事やどの様に対応してくれると助かるのかなど、様々な情報を知ることが出来ます。また、ヘルプマークもあります。ヘルプマークを身に付けている人がいたら、何かしらの援助や配慮が必要なのだと知って理解しようと思えます。

この様に「多様性の時代」だからこそ周りの人々に知ってもらおうと、隠すのではなくオープンに情報を発信する動きはとても意味のあることだと思っています。そしてとても勇気のいることでもあると思います。私だったら出来るかなと想像するだけで少し怖くなります。勇気を出して「個性」を発信するのは、人々に知ってもらい理解してもらおう為だと思います。だからこそ、差別をなくしみんなが生きやすい世の中にする為にも、一人ひとりがまずは知って理解しようとするところから始めていけば良いのではないかと考えます。

私はこれからも「個性」について知り、学び、理解していきたいです。「個性」は一人ひとり違います。否定されるものでもありません。尊いものです。「みんな違ってみんな良い」のです。

## 優秀賞

### 兄の働き方から考える

匿名

私の兄は、一昨年に精神障害を発症してしまった。そんな中でも一生懸命に働こうとする兄には尊敬の念を抱く。

ある日兄の給料について、両親が話しているのを耳にした。そこで私は驚くべきことを耳にした。兄の時給が、200円にも満たないと言うのだ。私はなぜこんなにも時給が低いのか疑問を持った。そこで私は、障がい者雇用の仕組みや現状について、親から聞いたりネットを使って調べたりすることにした。そこで分かったのは、障がいを持つ人の多くは特別な作業所や福祉施設で働いていて、そこで支払われる給料（実際には工賃という）は労働の対価というよりも支援という位置づけであるために最低賃金は適用されず、低くなっているということだ。これを知ったとき私は、障がいがあっても頑張って自立しようとしている方や障がいがあってもそれに負けないで一生懸命作業している方の対価としては不十分であり、不公平と感じると同時に悲しさを覚えた。私はこのように障がいを持つ人が生きづらい現状を変えていくべきと考える。

私は社会全体が「障がい者」というラベルに縛られすぎている

と考える。障がいを持つ人は、その病状によってマイナスな面ばかりに目を向けられているように感じる。しかし本当は一人ひとりに得意なことやできることがあり、社会が正しく導いていけば十二分に能力を発揮し社会に貢献してくれる存在だと私は考える。だからこそ社会は、障がいのある方を含めてもつと互いの「できない」を補い合い、互いの「得意」を尊重し合うことが求められていると考える。

ではそんな社会の実現には何が必要なのか。私は二つのことが必要だと考えた。一つ目は、国や自治体が障がいを持つ人への支援をもっと充実させていくことだ。作業による工賃が最低賃金ぐらいいなれば、障がいを持つ方は心にゆとりが生まれ、より自分の個性や能力を発揮してくれるだろう。二つ目は、私たちが障がいを持つ人に対する考え方を変えていくことだ。私たちは障がいを持つ人に対してあまり良いイメージを持っていないのが現状だと考える。それを説明するようにネットでは障がいを持つ人に対する差別的な発言や非難中傷が見られる。だが障がいを持つ人がその人の能力を活かしていく社会を作るためには、私たちが障がいを持つ人への理解を深めて偏見をなくしていくことが大切だと考える。そうすることで障がいを持つ人が応援される社会となり、互いを尊重し合える社会の実現に繋がると考える。

私は今回兄の働き方を通して障がい者の権利について考える機会を得た。そこで障がいを持つ人は、生きづらい世の中であ



るという現状を知った。障がいのある人が自由に個性や能力を発揮できる世の中になったとき、初めて人権は守られたと言える。私はそんな社会を作る一員になりたい。

## 優秀賞

### 「キセキ」

海西中学校 三年 濱田 梨央南

私には、自由に動く手が二本あります。行きたいところに行ける足が二本あります。今こうやって自分の思いをスラスラと文に書けることが出来ます。美しい物、そうではない物も全て心に記憶することも出来ます。毎日当たり前の様に聞こえてくる「ドレミファソラシド」。全ての音が奏でていきます。そして、毎日当たり前の様に何も気にすることもなく日々の生活を送っています。当たり前の様にです。

私の祖父母は産まれつき手足が不自由です。祖父は言語障害もあり言葉が上手く喋れません。正直、最初は聞き取りにくいこともありました。でも、まだ幼かった私にはよく理解が出来なかったのも事実です。そんな私に、一生懸命私に伝えてくれる祖父。こぼしながらも一生懸命美味しそうに食べてる祖父。一字一字をゆっくり一生懸命に思いを綴る祖父。ゆっくり、ゆっくりでも一生懸命に目的地へと向かう祖父。

祖母は左半身麻痺で右手しか自由に動きません。右手一つで沢山の料理をおもてなししてくれる祖母。右手一つで洗濯物を干したり畳んだり、大荷物を持ったりする祖母。何でも右手一

つで出来るスーパーマンです。しかし、世の中の目線はまるで冷たく感じたことがありました。それは、私が小学校六年生の時でした。

私は、祖父母とは遠くに離れている為、一年に一度しか会えません。だからこそ会いに行った時は沢山祖父母と一緒に過ごします。ある日、祖父と一緒に区役所に行くことになりました。祖父が一生懸命に担当のおじさんに話をしています。私は、横で聞いていました。そのおじさんは、首を何度もかしげたり、まるでバカにするかの様な態度でした。周りの人も見ていました。その目線は私には冷たく感じました。何も悪いこともしていないのに、ただ、ただ伝えたいことを、一生懸命に話そうとしているのにとっても悲しく、今まで感じたことのない感情でした。そして、祖父の後に受付をしていた人とまるで態度が違うことに、私は怒りを感じたのを今でも忘れられません。祖父はどんな気持ちだっただろう。きっと分かっていたはずなのに、私には笑顔で「待たせたね。」ととても温かかったのです。祖父に何と声をかけてよいのかとまどっている自分もいる中で「大丈夫？」と祖父に声をかけました。祖父は、何もなかったかのように「ありがとう。」とニコっと笑って返してくれたのを今でも鮮明に覚えています。祖父と一緒に歩いている時も、たまにちらほらこちらを冷たい目線で見えてくる大人達。その横で一生懸命に歩いている祖父の姿に言葉に出来ないほど悲しい気持ちになったことを忘れることはありません。みんな同じ人間なの

に何故？許せませんでした。

私はこのような体験から自分の体が自由に動くことは、当たり前ではない事に気付いたのです。障がい者という言葉も私の中では違うと思っています。障がいではなく個性だと思っています。「みんな違ってみんないい」個性です。

祖父は、その後まもなくしてお空へ呼ばれて飛び立って行ってしまいました。きっと今は空を自由に飛びまわっていると思います。

自由自在に動かすことが出来る体は当たり前ではなくキセキだと私は思っています。何一つ当たり前なんてないことを。

今の自分の体に感謝の気持ちを忘れなければ、きっと人権差別のない個性豊かな世界になると思っています。まずは、私の作文を読んでいるあなたに知ってほしい。

五体満足であることは、「キセキ」だということ。そして今、私もあなたも、「キセキ」であふれていることを。

## 優秀賞

### 「障がい者の働く環境」

海西中学校 三年 松田 風雅

私の叔母は学習障害で、現在は就労継続支援B型事業所で働いています。頑張って働いている姿を見て、障がい者の方がどのような職場で働いているのか興味を持ち、障がいのある方の働く環境について調べることにしました。障がい者といっても様々であり、叔母のような学習障害は知的障がいの一部です。体のどこかに欠損や体を動かす機能が損なわれている肢体不自由や視覚障害、聴覚障害、内部障害など、その種類は多くあります。

まず具体的に障がい者がどのようなところで働いているのか調べることにしました。就労の方法として、一般就労と福祉的就労の二種類があります。一般就労では製造業や飲食業など様々な分野で職場の配慮を受けながら働いています。福祉的就労では、一般企業で働くことが難しい場合に障がい福祉サービスを受けながら働くことのできる形式です。メリットは、個人の状態に合わせて働き方を調節できますが、デメリットとして一般就労より給料が少なかったり、働く場所が限られていたり、職場でのルールが厳しかったりします。

次に障がい者の働く環境について調べてみました。叔母の働く環境について聞いたところ、障がいがあり働いている方は三十人以上おり、運営スタッフの方が約二十人いるとのことでした。想像しているよりも働いている方も運営している方も多く、充実していると感じました。就労時間は週に五日、一日五時間、一般就労の方と比べて働いている時間は短いですが、働く日数は同じだということが分かりました。働く環境について不便に感じていることは特にないとのことでしたが、給料面での待遇は改善してほしいとのことでした。一般就労の方より働いている時間が少ないのは、知的障害の方でも集中力が保てるように少し短くなっているのではと感じました。そうした面からも障がい者への配慮があると考えます。働いてどう感じているかという質問には、「いろいろな仕事を覚えることができて外に出る仕事もあるため、いろいろな経験ができる。」とのこと、障がい者の方も幅広い経験を積める環境であることが分かりました。

車椅子で働いている人に話を聞くと、車通勤ができない企業でも車通勤が許可され、駐車場も優先的に使えるとのことでした。職場内でもデスクの高さを調整できることや身の回りの動線を配慮してくれるなどの配慮があるようです。最近では、コロナ禍で普及したりモーターワークにより、職場に出勤するのは月に数回程度であるとのことでした。

そのような話を聞き、近年の働く環境について調べると「イ

「インクルーシブデザイン」という考え方があることを知りました。インクルーシブデザインとは、マイノリティの人々も含めてデザインを作っていく考え方や手法です。海外に行った際に自国語でのアナウンスがないなど「一時的な排除」と直面することがないようにインクルーシブデザインでは、そのような「排除されてきた人々」をデザインプロセス初期から積極的に取り入れ、配慮するという考えに基づいて考えられてきたものです。具体的には、「段差のない入口」や「触って時間を知れる時計」、従来では肌色しかなかった絆創膏もインクルーシブデザインでは多様な肌の色に合わせたバリエーションのある「ユニバーサル絆創膏」があるなど、多岐にわたります。

インクルーシブデザインの考え方は、日本国憲法第十三条にある幸福追求の権利や個人の尊重を具現化しているひとつだと感じました。また、日本では、国外から世界中の方が観光などで来ることが増加しています。京都などの外国人が多く集まる観光地では、英語だけではなく、韓国語や中国語で案内看板や案内放送がされています。また、スロープなどによって段差を解消し、車椅子でも入れるように配慮されている一方で、車椅子では入ることができないと思われる場所も多くありました。そうしたことから、景観や風情を壊さないでバリアを解消できるような新たな発展や工夫がされることが望まれます。それにより、観光客だけでなく、そうした場所でも働くことのできる方も恩恵が受けられると考えます。

ここでは、障がい者の働く環境について考えてきました。父や母の子供のころは、駅にエレベーターやエスカレーターは設置されていなかったと聞きました。いまでは多くの駅で設置されており、構内の段差の横にはスロープが設置されるなど、多くの環境が改善されてきました。それにより、障がい者の外での活動が容易になったことで、就労の可能性が広がったと考えられます。また、インターネットの普及により、リモートワークしている方も増えており、より重度な障がいのある方も働くことができていることを知りました。このような発展や人々の理解によって、差別や排除されることのない世界になることを願います。

## 優秀賞

### 基本的人権を守る意味

海西中学校 三年 山川 結希

私は、これまでの十四年間の生活の中で、「基本的人権を守ることは、自分や他の人の人生を大切にすることだ。」と感じるようになりました。人権について簡単に言うと、「誰もが生まれながらにして持っている、生きていく上で欠かせない権利」ということです。このことは、私たちの身のまわりに深く関係しています。例えば、自由に意見を言ったり教育を受けたり、人として大切に扱われたりこれらすべてが人権といえます。私が基本的人権の大切さについて考えようと思ったのには、大きく分けて三つの理由があります。

一つ目は、これまでの学校生活の中で見聞きした「いじめ」のような言動についてです。例えば、見た目の特徴をからかったり、「○○に似ている。」と笑ったりして、からかわれている人が話しぶりや雰囲気になることを見たことがあります。直接的な暴力でなくても言葉や態度で人を傷つけることはあります。そうした様子を目にして、「これはただの冗談ではないのかもしれない。」「言われた人はどんな気持ちなのか。」と考えるようになりました。人を見た目や行動で笑いのにすることは、

「すべての人は個人として尊重されるべきである。」という基本的人権の一つである「個人の尊重」や「平等権」に反していると思います。このようなことが起きていることに気づき、私も「見て見ぬふり」をしない人間でありたいと感じました。

二つ目は授業で学んだ世界の人権問題についてです。社会の授業で、貧困や紛争、性差別などによって学校に通えない子どもたちが世界中にたくさんいることを知りました。中には、幼い年齢で兵士として戦争に参加させられたり、家族のために働かされたりする子どももいます。私は旅行でタイに行ったときに子どもたちが働く現実を知りました。これらの子どもたちは、本来であれば「教育を受ける権利」や「自由に意見を持つ権利」「安全に生きる権利」などを保障されているはずですが、しかし現実にはそれが守られていない人たちが大勢います。私たちが当たり前のように学校に通い、毎日安心して暮らせることがどれほど恵まれたことなのか実感しました。また、世界各地にはまだ人権が守られていない場所がたくさんあることを忘れてはいけないと思いました。

三つ目は、地域ボランティア活動を通して感じた「助け合いの大切さ」についてです。私は、一年前に地域のお祭りのボランティアに参加しそこで、子供からお年寄りまで様々な人が協力しながら準備や片付けを行い、お互いに声をかけながら行動する輪の中に入り人と人が支え合うことで社会が成り立っているのだと感じました。自分一人ではできないことも、誰かと力

を合わせることで成し遂げられる。人は誰もが違う存在で、それぞれにできること、得意なことがあります。それを認め合い、尊重し合うことこそが、基本的人権を守る第一歩だと思いました。ボランティアを通して、人とのつながりの中で互いの存在を認めることの大切さを実感しました。

こうして考えてみると、基本的人権を守るということは、特別なことをするわけではありません。身近な人の話に耳を傾けること、相手を見た目や立場で判断しないこと、自分の意見を言うと同時に他の人の意見も尊重すること。そうした小さな行動の積み重ねが、人権を守る力になる。私はそう思います。

今、世界では様々な人権問題が起きていますが、だからこそ、私たち一人ひとりが「人権を守る」という意識を持つことが重要だと思います。そして、たとえ自分に関係がないと思っても無関心でいることは、知らないうちに差別や不平等を見逃すことにつながってしまいます。だから私は社会の中の小さな声にも気づき、寄り添うことのできる心を持ち続けたいと思いました。

これから私は、自分の周りの人に対しても、世界各地で困っている人に対しても、「同じ人間としての権利がある」という視点を忘れずに行動していきたいと思います。例えば、困っている人を見かけたら声をかける、差別的な言葉を聞いたらその場で注意をする、世界の問題に目を向けることなど、小さなことからでも始められると思います。

基本的人権は、すべての人が幸せに生きるための土台です。その土台を壊すのではなく、支えることができる人になりたいと、強く思っています。

## 優秀賞

### 「言葉の重さ、思いやりの力」

海西中学校 三年 横山 アイシヤマフムード

私は日本人とパキスタン人のハーフです。普段は友達と楽しく学校生活を送っていて、差別されるようなことはなかったです。でも小学三年生の頃、近所の人に外見や出身のことで差別のような言葉を言われました。私は初めて言われたので、どうしてそのようなことを言うのかと思いました。それと同時にとても悲しくなりました。その人にとっては何気ない一言だったのかもしれませんが、言われた私にとっては心に残る言葉でした。家に帰ってからもずっと思い出してしまい胸が重くなるような気持ちだったのを今でも鮮明に覚えています。「私は日本で産まれたのに。」「他の子と違うってダメなのだろうか。」「という気持ちと」「私は他の子とどうして違うように見られるのだろう。」「という気持ちでいっぱいでした。自分という存在が否定されたように感じ、しばらくは人の視線が気になって外に出るのですら少し怖くなりました。その時家族が「あなたはあなたのままで、あなたらしくていいんだよ。」と言ってくれました。その言葉を聞いて私は少し安心しました。家族の支えがあったから私は前を向くことができ今の自分があります。もし、一人で

抱え込んでいたらもっとつらくて苦しかったと思います。この経験から困っている人や傷ついている人に、「味方がいるよ。」と伝えることが大切だと学びました。

今、中学三年生になって「人権」について考えたりして、実は私たちの日常生活の中にもたくさんの繋がりがあるのだと知りました。それって本当に人権なのって思うことがあったりしましたが思いやりの心をもったり、相手の立場で考えたりすることも人権を守ることなのだと分かりました。例えば授業中に意見を言えずにいる友達がいた時、その子の気持ちを考えてみることも人権を大切にすることだと思います。小さな行動でもそれが積み重なれば周りの雰囲気は変わっていくはずです。私はこの経験から学んだこと、とは別に思ったことがあります。それは「人は見た目や国籍だけで判断してはいけない」です。どんな国や文化、見た目であってもみんな同じ人間です。みんなが大切な存在だと思います。言葉や態度で人を傷つけるのは簡単ですが、思いやりの言葉をかければ、自分も相手も笑顔にすることができます。私は、相手も笑顔にする人でありたいと思います。もし、また同じような言葉を言われたとして「それは間違っている。」と勇気を出しても言えないかもしれない。ですが同じようなことを言われて悩んでいる人がいたら「大丈夫だよ。」と寄り添いたいです。人権を守るためには、ある一定の人や誰か特別な人だけがやることではなく私たち一人ひとりが意識してできることだと思うからです。そして違いを理由に距



離を置くのではなく「違うからこそ面白い。」「一緒にいると学べる。」と思えるようにしたいです。

私の願いは、いろいろな文化の人が当たり前のように仲良く暮らせる社会になることです。そのためにはまずは、身近な学校や地域で相手の違いを認めて受け入れられる人になりたいと思います。

あの日の出来事は私にとってつらい経験でしたが、人権の大切さを自分のこととして今考えるきっかけになりました。これからも「差別はしない。」という思いを大切にして、誰もが差別を受けないということは少しだけ難しいと思うので誰もが安心して過ごせるような社会に近づけるようにしていきたいです。

## 優秀賞

何も変ではない

匿名

皆さんは性的マイノリティ、LGBTQというものを知っているだろうか。LGBTQというのは恋愛対象が同性であるレズビアンやゲイ、心と体の性別が異なる認識をしているトランスジェンダーなどの性的少数者を指す言葉だ。現代社会は多様であり性的マイノリティに理解がある。

性的マイノリティの同性愛者の話は昔からあり珍しくもないものだ。例えば歴史上の人物である織田信長。彼も同性愛的な関係が彼の側近の森蘭丸とあったのではと推測されている。これは憶測ではない。真実は本人にしかわからない。だが室町時代から戦国時代にかけて日本には「衆道」という男同士の特別な主従関係が存在していた。現在のように必ずしもそこに恋愛感情があるというわけではなかったが特別な関係を持っていたのは確かだろう。別用語として「男色」というものがある。日本において「男色」という男性の同性愛は古代から存在していたそう。歴史上の人物で有名な源頼朝も徳川家康も織田信長も有名戦国武将も皆「男色」関係を持っていたそう。このように歴史上では男性同士の恋愛は一般的に見られていた時代

があり何もおかしくない。女性同士の恋愛レズビアンもそう珍しくない。最も古い記録は古代ギリシャまで深い歴史がある。男性同士の恋愛も同じく古代ギリシャから古い歴史がある。

同性愛を例として出したが他のセクシャルマイノリティも深い歴史がある。このように性的マイノリティは最近出てきたものではなくずっと昔からある考えで何もおかしくないものだ。そう何もおかしくないのだ。しかし日本は数年前まで性的マイノリティに対して批判的な考えを持っていた人が多くいた。現在では理解ある人が増えたが批判的な考えを持った人がゼロになったわけでもない。批判的な意見を持っている人は、私の偏見となってしまうが私達の「親世代」に多いと思っている。いや自分の親がそうだったから私がそう思っているのかもしれない。私は性的マイノリティというバイセクシャルだ。

異性も同性も恋愛対象でありどちらにも好意を抱いたことがある。最近は異性に興味がほとんど湧かなくなり同性への恋愛感情のほうが日に日に大きくなっている。バイセクシャルではなくレズビアンに近くなっているのだろう。私は女の子に告白したことがある。異性の友人や同性の友人に恋愛相談もしたことがある。告白した女の子には振られてしまったが彼女は私のことを気持ち悪いとは言わず、友達のままでもいいと伝えてくれた。相談した友人たちも私を軽蔑することなく話を聞いてくれた。他の友人に伝えたときも軽蔑したような目を向けることはなく優しく受け入れてくれた。私の周りの友人はみな優しく性

的マイノリティに理解があった。だが私の母は違った。小学三年生の頃、母と一緒に音楽映像を見ていた。その映像に写っている男性は同性愛者で曲もそれに関連するものだった。当時の私は自分が同性愛者だという自覚は全くなかった。母が性的マイノリティについてどう思っているのか気になり、私は母が肯定的な意見だろうと予想しながら質問をした。だが母から返ってきた言葉は「気持ち悪い。おかしい考え方だ。変人だ。」と肯定的なものではなかった。母が動画の男性に向けたあの軽蔑した目は忘れられない。私はこの先両親に自分が性的マイノリティだとカミングアウトをするのは難しいだろう。友人に伝えるのは勇気が必要だったがそこまで怖いものではなかった。だが自分のことを一番わかってくれる両親に打ち明けることがこんなに怖いと感じることはとても辛いことだと思う。

この多様性の現代社会で私のような悩み、気持ちを抱いている人は少なくないだろう。周囲に自分の気持ちを打ち明けられる人が一人もおらず一人で抱えて苦しんでいる人がいるかも知れない。日本では自殺までに追い込まれてしまう子も少なくはないと調査で出ているようだ。私は今の理解度では足りていないと思っている。親の何気ない一言で子どもは深く傷を負う。それが自殺までに追い込まれてしまうかもしれない。私はそんな世の中が一刻も早くなくなって欲しいと思っている。そのためには親の理解は必要不可欠になってくと思う。一番の理解者の親に理解してもらっただけでも子どもはぐっと気持ちが楽に

なり自由に生きられるだろう。性的マイノリティは決しておかしい考え方ではない。私たちは決して変な子ではない。普通に恋をして普通に生きているみんなと何もかわらない子だ。だから親の皆さんにはその子達の一番の理解者となってほしい、決して気持ち悪いなどと子どもを突き放さず優しく向き合ってほしい。そういう家庭がひとつでも増えてほしいと思っている。だから私は人権作文のテーマをこの話題にした。私もいつか母に自分の気持ちを打ち明けることができるように頑張ろうと思う。

◆ 人権ポスター部門



# 市長賞

なりたい自分へなれる自由を



今泉中学校 二年 大高 優奈

## 優秀賞

育てよう思いやりの心

海老名中学校 二年 何 霖



## 優秀賞

あなたの笑顔がもどるまで

ずっとそばにいるよ

今泉中学校 一年 皆川 真帆





## 優秀賞

育もう！つながる心

今泉中学校 一年 深谷 あかね



◆ 子どもたちによる  
“平和なまち” 絵画部門



海老名市イメージキャラクター  
えび～にゃ



優秀賞【六～十歳の部】



有鹿小学校 二年 雨宮 世奈

《作品に込めた平和への思い》

仲の悪い国もあるけれど空は一つでつながっているの  
で仲良くしてほしいと思います。平和を続けたい。

優秀賞【六～十歳の部】



今泉小学校 三年 里田 美月

《作品に込めた平和への思い》

自然がたくさんで春夏秋冬楽しめるまち

優秀賞【六～十歳の部】



柏ヶ谷小学校 三年 高野 香穂

《作品に込めた平和への思い》

身近な人から思いやりをしていけば世界が平和になると思  
ったから



優秀賞【六〜十歳の部】



門沢橋小学校 二年 谷井 彩帆

《作品に込めた平和への思い》

わたしにとつての平和は大好きなトウモロコシを  
お腹いっぱい食べれる世界です。大好物を食べると  
幸せな気持ちになるし、おなかがいっぱいになれば、  
笑顔になれるからです。

優秀賞【六～十歳の部】



海老名小学校 一年 田原 ゆず季

《作品に込めた平和への思い》  
みんな笑って楽しく過ごせるといいなと思っています

## 優秀賞【十一〜十五歳の部】



海老名中学校 一年 中島 百香

《作品に込めた平和への思い》

私が思う平和は、見渡すと木、草花が生えていて、遠くからは川が流れている。ふと見上げると、どこまでも青く澄んだ空が広がっている。そういう世界です。私の住んでいる街では、それが当たり前ですが、世界には、そうでない国もたくさんあります。自然だけでなく、住む場所や、遊んだり勉強できる環境、食べる物が無い所もたくさんあって、不幸な気持ちになっってしまう人がいます。みんな同じ、人間なのに。気に食わないから戦争・紛争を起こしたり、男女の差、障害の有無で人を決めつける姿を見れば、誰だっていやな気持ちになるし、何も良いことはありません。だから、どうか戦いや差別のない世界になってほしい。そんな願いを込めて描きました



## 優秀賞【十一〜十五歳の部】



有馬小学校 五年 福田 優里奈

《作品に込めた平和への思い》

作品に込めた平和への思いは、みんなが空の青色みたいな鮮やかさに楽しい人生を生きてほしいなと思って、青や黄色を上から重ねて塗ってきれいにしました。女の子が見上げている鳩は平和の象徴としてあるので、世界が平和になったら良いなと思いながら描きました。女の子が持っている花は「ムスカリ」と言っていて、花言葉は「明るい未来」や「膨大な愛」などの意味があります。世界のみんなも明るい未来を持って過ごしてほしいなと思いました。世界が色鮮やかになって平和になりますようにと願っています。

優秀賞【十一〜十五歳の部】



有馬中学校 一年 藤本 桜子愛

《作品に込めた平和への思い》

自分が一人だと思っても、必ず周りに自分を見てそばにいてくれる人がいるということが私にとっての平和です。



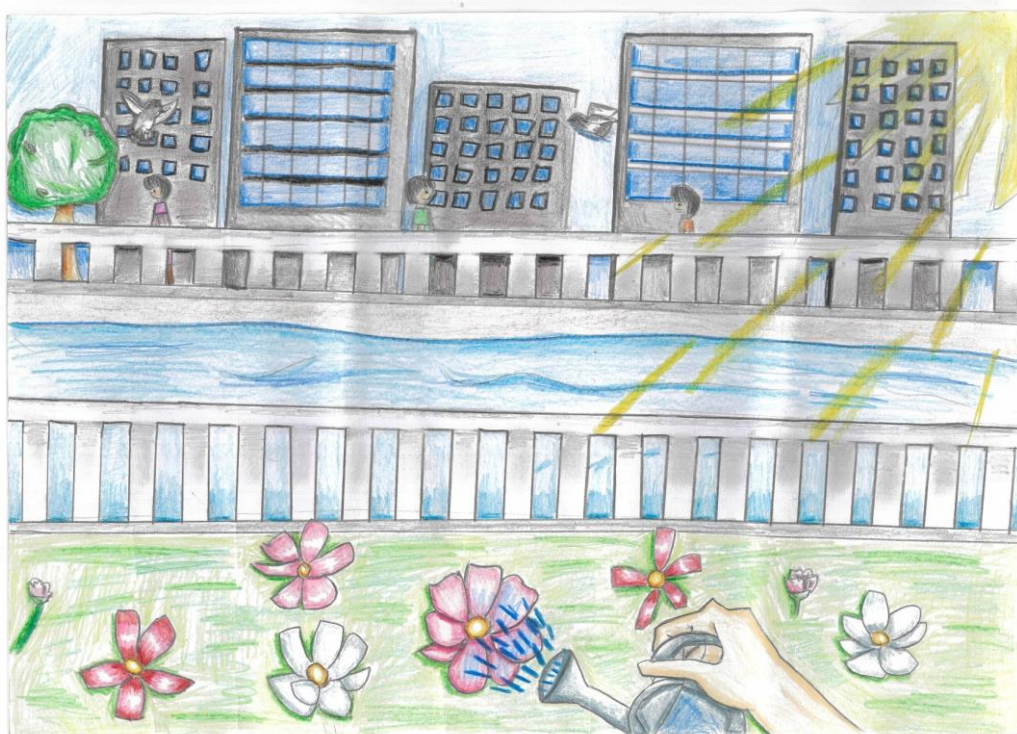
優秀賞【十一〜十五歳の部】



杉久保小学校 五年 守屋 咲音

《作品に込めた平和への思い》  
世界じゅうの人たちが幸せで楽しく平和にいられるように  
と思いながらきました。

優秀賞【十一〜十五歳の部】



柏ヶ谷中学校 三年 渡邊 葵

《作品に込めた平和への思い》

平和ということで花や川などの緑あふれる自然や何気ない日常が平和そのものだと考えたため、花に水をあげるといふ身近でかつ温かみのある風景を表した。また、時間帯を朝としたのは、朝は「希望の朝」と言われたり1日の始まりであるためと明るいイメージがあるため、朝日を強調した。





市ホームページで  
人権情報発信中です！



人権イメージキャラクター 人KENまもる君

人KENあゆみちゃん

令和7年 12 月発行

編集・発行 海老名市 市民協働部 市民相談課  
人権男女共同参画係  
海老名市勝瀬 175 番地の1  
電話 046-235-4568 (ダイヤル)



住みたい 住み続けたいまち

